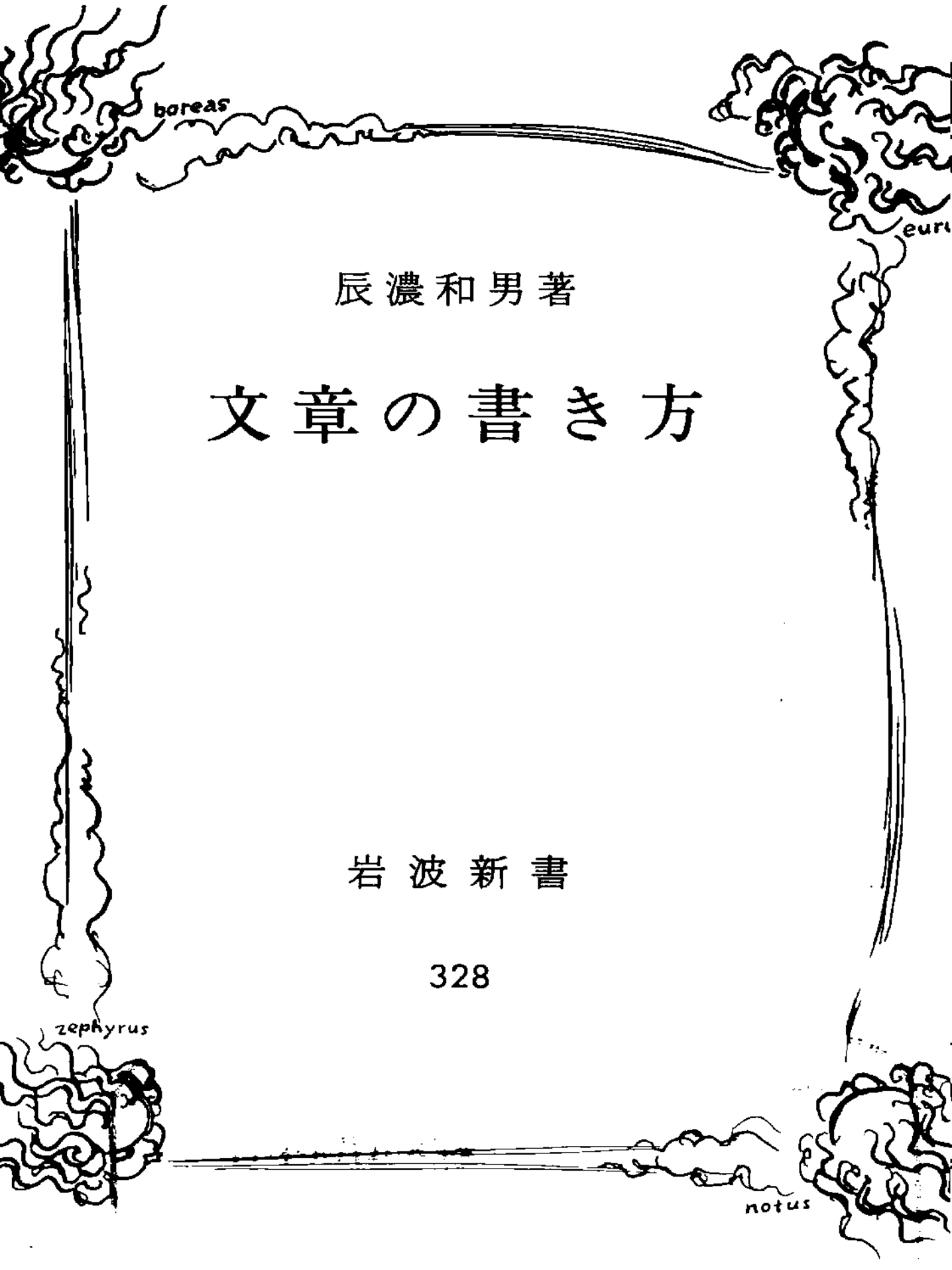
辰濃和男著

文章の書き方



辰濃和男著

文章の書き方

岩波新書

328

辰濃和男

1930年東京に生まれる
1953年東京商科大学(一橋大学)卒業，朝日新聞社入社．ニューヨーク特派員，社会部次長，編集委員，論説委員，編集局顧問を歴任．この間，1975-88年，「天声人語」を担当．93年退社．
現在—朝日カルチャーセンター社長，日本エッセイスト・クラブ専務理事
著書—「辰濃和男の天声人語〈人物編〉」(朝日文庫)
「辰濃和男の天声人語〈自然編〉」(同上)

文章の書き方

定価はカバーに表示してあります　岩波新書(新赤版)328

1994年3月22日　第1刷発行

著　者　辰濃和男(たつのかずお)

発行者　安江良介

発行所　株式会社 岩波書店
〒101-02 東京都千代田区一ツ橋2-5-5

電　話　案内 03-5210-4000　営業部 03-5210-4111
新書編集部 03-5210-4054

印刷・精興社　カバー・半七印刷　製本・永井製本

© Kazuo Tatsuno 1994
ISBN 4-00-430328-1　Printed in Japan

まえがき

ここ数年、人さまの前で文章のことを語る機会が何回かありました。

文章のコツを語るなんていうのは誠におこがましい話なのですが、おこがましいと知りつつ、語っているわけですから、われながらいい気なものだと思います。話すだけではなくて、いままた文章のことを書こうとしている。いい気になるなよと己を戒めつつ、書き続けることにします。

おこがましいと知りながら、なぜ文章のことを書くのか。

それは「文は心である」ということを、少し考えてみたいと思ったからです。文章についての技術論は大切です。それを軽視しようとは思いません。たとえば文の長さは長すぎないほうがいいとか、漢字は多すぎないほうがいいとか、そういう技術論についても、この本では書くつもりです。

しかし、とくに考えてみたいのは「文は心である」ということです。正確にものごとを見る訓練をおろそかにしている人が、はたして正確な文章を書くことができるでしょうか。大

自然と遊ぶたのしさを知らない人が、人の心をとらえる自然の描写をすることができるでしょうか。品性のいやしさが顔に現れている人が、品格のある文章を書くことができるでしょうか。いらいらせかせかの気分のまま机に向かって、読む人の心にしみる落ち着いた文章を書くことができるでしょうか。ひとりよがりなことばかりをいっている人が、目配りのきいた、均衡のとれた文章を書くことができるでしょうか。表面はごまかせるかもわかりません。しかし心のゆがみは、その人の文章のどこかに現れます。

ですから、文章の修業をするということは机の前に座ったときにはじまるわけではないのです。いい文章を書くことと、日常の暮らしの心のありようとは深いつながりがあります。その人の文章のありようと、その人の生きる営みとは切り離せません。

文章を人さまに見せることは、己自身の心の営みをさらけだすことでもあります。恥ずかしながら、という気持ちからぬけきれません。長年、新聞の短評欄を書き続けた先輩記者が、私にいったことがあります。「毎日毎日、書いているうちに、面の皮がすっかりあつくなってね。髭を剃るのが大変だよ」

長い間、ものを書いてきたおかげで、文章の書き方について、あれこれのことを考える機会に恵まれました。この本では、いままでの自分の経験のなかで気づいたことの断片、あるいは、先達の文章から学んだことの数々を並べてみます。なにか一つでもいい、参考になる

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ことを見つけてくださったらうれしいと、そういう思いで筆を進めてみます。

文章のことをあまり、要素で分けたりするのは避けたほうがいいのかもしれませんが、一応、三つの巻に分け、さらにそれぞれ五つの主題に分けて書いてみます。この十五の主題は横一列に並ぶものではなく、実際に文章を書くとなれば、重複し、錯綜しているものです。説明の便宜のために、分けてみただけのことです。

第一の巻では、文章を書くさいの準備段階というか、材料を仕込むときの心構えといったことを書いてみます。

広い円
場(現場)
無(無心・白紙)
欲(意欲)
感覚

の五つの主題を扱います。いちばん上の文字をつないで〈広場無欲感〉の巻とします。

第二の巻は、文章を書くうえで、基本的に大切なことと考えていることです。

平明
均衡

遊び
具体性
品格

の五つの主題を扱います。これもいちばん上の文字をつなぎあわせて〈平均遊具品〉の巻としておきましょう。

第三の巻は、実際に文章を書くときの表現上の心構えです。

整えること
正確
新鮮
選ぶこと
流れ

という五つの主題を扱います。上の文字をつなぎあわせて〈整正新選流〉の巻とします。

〈広場無欲感〉などの三つの奇妙なことばは、どれも何やら意味ありげに思われるかもしれませんが、読む方の頭に残りやすいように、並べ方をちょっと工夫してみただけのことです。

この本はどの章から読んでもらってもかまいません。お好きなところから、拾い読みをしてくださって結構です。

目次

まえがき

一　〈広場無欲感〉の巻――素材の発見……1
広い円――書くための準備は　2
現場――見て、見て、見る　15
無心――先入観の恐ろしさ　31
意欲――胸からあふれるものを　46
感覚――感じたことの表現法　59
二　〈平均遊具品〉の巻――文章の基本……83
平明(1)――わかりやすさの秘密　84
平明(2)――読む人の側に立つ　100
均衡(1)――文章の後ろ姿　110
均衡(2)――社会の後ろ姿　122

遊び――異質なものとの出あい　131
具体性――細部へのこだわりを　146
品格――ものごとを見つめるゆとり　164

三〈整正新選流〉の巻――表現の工夫……177

整える――気をつけたい六つのこと　178
正確――終着駅のない旅　188
新鮮――避けたい紋切型の表現　201
選ぶ――余計なものをそぎおとす　212
流れ――書き出しから結びまで　223

出典一覧

一

〈広場無欲感〉の巻

――素材の発見――

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

広い円――書くための準備は

「下塗りをおろそかにしては、あつみのある、ぽってりとした色は出ません」

谷正利はそんな表現で、下塗りの大切なことを強調していました。谷は飛騨高山に住む、春慶塗りの名手です。

使えば使うほど底づやの出てくる漆器を作るには、下塗りが大切です。まず豆汁を塗って下地を作る。ついで漆の下塗りをする。二カ月ほど寝かせてからまた下塗りをする。五度も六度も下塗りを繰り返す。そういう丁寧な仕事のあとに、上塗りをします。あのやや黄みをおびた琥珀の色つやはそうして生まれるのです。

文章でも、同じことがいえるのではないでしょうか。

別の言葉でいえば、こういうことです。

土のうえに直径一メートルの円を描き、その円内で円錐状の穴を掘ります。次に直径五メートルの円を描いて穴を掘ります。どちらがより深く穴を掘ることができるか。いうまでも

なく、円が大きければ大きいほど、穴も深くなります。

ものを書くときは準備が大切です。小さな円を描いたのでは、それだけのもので終わってしまいます。はじめから思い切って広い円を描いて準備をすれば、内容の深いものが生まれます。

と、言葉でいうのは簡単ですが、土を掘れば石ころもある。木の根っこもある。そういうものと根気よく格闘しなければならない。人はともすれば易きにつきがちです。つい小さな穴ですまそうとする。

しかし小さな穴でごまかした文章は、結局はそれだけのものです。「一冊の本」という題で文章を書く。本屋さんで一冊買ってきてぱらぱらとめくって、それだけで書き始めても小器用な人ならある程度のことは書けるでしょう。

別の人は、昔から大好きだった本のことを書く。五回も六回も読んだ本です。十年前に読んだときと今度あらためて読んだときの違いなんかを書く。たとえ表現がまずくても、深いものが書けるはずです。うすっぺらでも小器用にまとめられた文章がいいか。多少たどたどしくても深みのある文章がいいか。私はためらうことなく、後者を選びます。

広い円を描くことの実際的な方法に、たとえば日記があります。

新聞社の試験を受けたいという若い人に会うと、私はこういいます。「日記をつけなさい。踊りの修業をする人は、稽古を一日怠るだけで後戻りをするといいます。書く訓練も同じです。なんでもいいからその日のことを書く、という訓練を己に課しなさい。たのしんで書けるようになればしめたものです」

作家の池波正太郎は「食べもの日記」を欠かさなかったそうです。何十年も、毎日、食べたものを書きとめておいた、というから相当なものです。

一、トウフの味噌汁、飯、納豆、香の物（ナス）

二、牛肉アミ焼き、冷酒、サワラの塩焼き

三、きつねうどん

という具合です。一、二、三というのは池波流の表現で、第一食、第二食、第三食の意味です。おいしかった料理にはしるしをつけておく。レストランで食べたときは場所と同席者の名前を書いておく。

鬼平の話にせよ、仕掛人・梅安の話にせよ、よく食べものの話がでてきます。作品に登場する食べものはみな、いかにもうまそうで、季節のこまやかな味がでています。「食べもの日記」のせいでしょう。

こんな文章があります。

「冬に深川の家へ遊びに行くと、三井さんは長火鉢に土鍋をかけ、大根を煮た。土鍋の中には昆布を敷いたのみだが、厚く輪切りにした大根は、妻君の故郷からわざわざ取り寄せる尾張大根で、これを気長く煮る。

煮えあがるまでは、これも三井さん手製のイカの塩辛で酒をのむ。柚子の香りのする、うまい塩辛だった。

大根が煮あがる寸前に、三井老人は鍋の中へ少量の塩と酒を振り込む。

そして、大根を皿へ移し、醤油を二、三滴落としただけで口へ運ぶ。

大根を噛んだ瞬間に、

『む……』

いかにもうまそうな唸り声をあげたものだが、若い私たちには、まだ、大根の味がわからなかった」

なんということはない。大根の輪切りにしたやつを煮るだけの話ですが、池波の手になると、煮あがったばかりの大根をすぐにでも食べてみたいという気になる。こういうさりげない食べものの描写も、日ごろから広い円を描いているからこそ自然に生まれてくるのでしょう。

作家の宇野千代は、ある日、天狗屋久吉という阿波の人形師に会いました。八十すぎの人

でした。彼は縁側に坐って、一日中、ノミを使って木を刻みます。「十六の年から、こうして毎日、木を刻んでましたのや」という人形師の言葉を聴いて、宇野は思います。そうだ、毎日、書くのだ、と。

宇野が非凡なのは、思っただけではなく、それを実行したことです。

「書けるときに書き、書けないときには休むと言ふのではない。書けない、と思ふときにも、机の前に坐るのだ。すると、ついさつきまで、今日は一字も書けない、と思つた筈なのに、ほんの少し、行く手が見えるやうな気がするから不思議である」

人形師が毎日縁側に坐るように、毎日、必ず、机の前に坐る、そうすればおのずから文章が書ける、と宇野はいっています。

かつて『週刊朝日』が「私の文章修業」という連載をしたことがあります。

のちに一冊の本になりましたが、これを読むと、文章の修業のためには広い円を描くのがいい、といっている人が何人かいます。広い円という言葉は使っていませんが、そう受け取れる言い方をしています。

作家の吉行淳之介は、広い円のことを「地面の下の根」と表現しています。

吉行によれば、文章というものはそれだけが宙に浮いて存在しているものではない。内容

あっての文章である。地面の下に根があって、茎が出て、それから花が咲くようなもので、根と茎の問題が片づかなくては、花は存在できない。

そこが厄介なところで「一つの作品ができ上ると、一たんすべてが取払われて、地面だけになってしまい、またゼロからはじめなくてはならない。その上、その土地の養分はすべて咲いた花が使い切ってしまっているので、まず肥料の工夫からはじまる」。いい肥料をやり、いい土をつくれば、根が張り、茎がしっかりと伸び、立派な花が咲く。立派な花を咲かせるには、いい肥料、いい土が大切なのだと吉行はいいます。ということは、広い円が大切なのだというのと同じでしょう。

作家の向田邦子は小学四、五年のころ、夏目漱石の『坊ちゃん』『三四郎』『吾輩は猫である』を読んだそうです。後年、「漱石先生から大人の言葉で、手かげんしないで、世の中のことを話してもらった」と回想しています。父の本棚の『世界文学全集』や『明治大正文学全集』をむさぼり読むことで、向田邦子は幼いころから広い円を描いていたのです。

向田は、本によって自分の知らない世界をのぞくたのしさについて、こんなことを書いています。未知の分野とつきあうことは、自分の世界をそれだけひろげることになります。

「私はひところ、『黄金分割』というやたらにむずかしい建築の専門書を読んで——いや、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com